



2024年野球殿堂入り通知式

館長 庄司正信

1月18日(木) 野球殿堂博物館を臨時休館にし、午後2時30分より殿堂ホールにおいて2024年野球殿堂入り通知式を開催いたしました。今年も関係者のみの出席で、メディア、維持会員の皆様はYouTubeのオンライン視聴とさせていただきます。

競技者表彰のプレーヤー表彰は、横浜、中日で活躍された谷繁元信さん、広島で活躍された黒田博樹さんが選出されました。エキスパート表彰は、残念ながら該当者無しでした。特別表彰からは、アマ野球・プロ野球で審判を務めた故・谷村友一さんが選出されました。

当館の榊原定征理事長から本年の野球殿堂入りの発表がなされた後、澤田啓太郎



前列左から 谷繁元信氏、黒田博樹氏、榊原定征理事長、松村和佳子氏、米井林太郎氏
後列左から 権藤博氏、山本浩二氏、相澤孝行氏

競技者表彰委員会代表幹事及び井原敦特別表彰委員会議長より、それぞれの委員会での選考過程について報告がありました。続いて、殿堂入り通知書の授与、顕彰者の挨拶が行われました。

最初に谷繁さんから、両親、家族、今までの野球生活、人生でお世話になった方たちへの感謝とともに「プロ野球生活27年間耐え抜いた体に感謝したい」と自身を労う言葉があり、今後も野球界に貢献したいとの決意が語られました。次に黒田さんから、「ゲストスピーチにお越しいただいた山本監督に先発投手、エースとしての心構え、責任などを学ばせていただいた」と御礼の言葉、日米含め20年間の野球生活で関わった方々、ファンの皆さんへの感謝が述べられました。谷村さんのお孫さんの米井林太郎さんは、プロ野球審判退任後、高校野球開催期間は連日甲子園球場に通っていたことや「自分のことを得意げに話したり、自慢することはなかった」とお祖父様の思い出を語られました。

引き続き、ゲストスピーチに移りました。谷繁さんには横浜時代の監督である権藤博さん(2019年殿堂入り)より、お祝いの言葉と「チームにとって頼りになる存在だった」と現役時代の谷繁さんを讃える言葉がありました。黒田さんには、広島で監督だった山本浩二さん(2008年殿堂入り)より、「あの当時から先発すると完投のことしか考えない、ガッツのある、根性のある選手だった」と現役当時を振り返り語っていただきました。谷村さんには同志社大学野球部の後輩である日本高等学校野球連盟顧問の相澤孝行さんより、「野球大好き、勤勉、真面目、頑固、そして少しのユーモアを持っていた」と谷村さんの人柄をお話していただきました。最後に殿堂入りされた方々、ゲストスピーカー、理事長に加え谷村さんのお嬢様を交えた記念撮影を行いました。

今回はプロ野球関係者の方3名が野球殿堂入りということになりました。顕彰者の皆様、野球殿堂入りおめでとうございます。

2024年野球殿堂入り

競技者表彰委員会

第64回競技者表彰委員会はプレーヤー表彰で大洋、横浜、中日で活躍した谷繁元信氏と、広島、大リーグ・ドジャース、 Yankeesで活躍した黒田博樹氏を選出した。

プレーヤー表彰の候補者は、現役引退から5年経過かつ20年以内の有資格者の中から競技者表彰委員会幹事会が選ぶことになっている。今回は27名が選ばれ、15年以上の野球報道経験を持つ委員が最大7人連記で投票を行った。委員総数は358、投票委員数は354、有効投票数は354だった。

当選には有効投票数の75%以上の得票が必要で、今回は266票。谷繁氏と黒田氏の得票数は同数で、ともに得票率79・4%の281票を獲得した。谷繁氏は資格を得てから4年目、黒田氏は3年目の殿堂入りとなった。

谷繁氏はプロ野球史上最多の3021試合に出場。うち2963試合を捕手で出場し、ギネス世界記録に認定された。実働27年間で毎年本塁打を放ち、27シーズン連続本塁打もまた、ギネス世界記録として認定されている。1998年には横浜で、2007年には中日で日本一。横浜を38年ぶり、中日を53年ぶりに、プロ野球の頂点に導いた。

殿堂入り通知式でゲストスピーチを行った元横浜監督の権藤博氏（2019年殿堂入り）は、谷繁氏のすごさに「体の柔らかさ」「ハンドリングの良さ」をあげ、「彼を支えてきたのは、何とかレギュラーをつかみ続けるという執念」と評した。



谷繁 元信氏

谷繁氏 通算成績			
NPB実働27シーズン	3021試合	8774打数	2108安打
229本塁打	1040打点	打率.240	

黒田氏は闘志むき出しの姿でファンを熱狂させた。渡米前の広島時代は先発完投型のエースとして君臨し、2005年に最多勝、2006年に最優秀防御率のタイトルを獲得。大リーグではドジャース、Yankeesという名門チームで先発ローテ

ションを守った。現役最後の2年間は再び広島のユニホームを着て、2016年にはチームの25年ぶりリーグ優勝に貢献した。

ゲストスピーチは広島時代の恩師、山本浩二氏（2008年殿堂入り）。「先発するとリリーフはいらない。かたくなに1人で投げ抜いて、勝ちを取るという性格的にもガッツ、根性のある選手。寡黙ではあるが、努力の人」と讃えた。



黒田 博樹氏

黒田氏 通算成績			
NPB実働13シーズン	321試合	124勝105敗1セーブ	
2021.2回	1461奪三振	防御率3.55	
MLB 実働7シーズン	212試合	79勝79敗	
1319回	986奪三振	防御率3.45	

一方、エキスパート表彰は2年ぶりに該当者なしだった。

投票権を持つ委員は、すでに殿堂入りされている方と競技者表彰委員会の幹事及び野球報道経験30年以上の方々。今回の委員総数は153、投票委員数147、有効投票数は147だった。幹事会が選んだ18名の候補者を対象に、最大6人連記で投票を行った。当選には75%以上の得票が必要で、今回は111票。残念ながら必要得票数に達した方はいなかった。

最多得票の掛布雅之氏は109票で、当選にわずか2票足りず。現役時代にクリーンアップを組んだランディ・バース氏（2023年殿堂入り）に続くことはできなかった。目立ったところでは、長池徳士氏が前回から20票を上積みし、得票数2位の91票を獲得した。両氏には来年こそ期待がかかる。

その来年度には、日米通算4367安打のイチロー氏がプレーヤー表彰候補としての資格を得る。同じく2019年度に引退した上原浩治氏、阿部慎之助氏らも有資格者となる。今年度の結果から言えば、資格1年目で232票（得票率65・5%）を獲得した岩瀬仁紀氏、221票（同62・4%）を獲得した川相昌弘氏らに殿堂入りの可能性がある。

競技者表彰委員会代表幹事 澤田 啓太郎

写真提供：ベースボール・マガジン社

2024年野球殿堂入り

特別表彰委員会

第63回特別表彰委員会は、1月15日に東京ドームホテルで開催され、本年の殿堂入りに高校・大学・社会人そしてプロ野球で審判を務められた谷村友一氏を選出した。

今年は、昨年の候補者から野球殿堂入りした古閑裕而氏らを除く7名の候補者に、新たに3名の候補者を加えて選考が行われた。当日の委員会には委員14人全員が出席。表彰委員会規程第25条が定める委員半数以上の出席となり委員会は適正に成立した。

選考の議論では、まず候補者全員の履歴・球歴が改めて紹介され、委員がそれぞれに意見が述べた。特別表彰は様々なカテゴリーの野球人が対象となる。アマチュア選手、審判員、指導者、組織や大会運営への功績、国際交流、底辺拡大といった振興活動への貢献、そして野球文化の発展や魅力の発信の業績。これらは表彰委員会規程第24条で規定されている候補者要件である。その内容は幅広い。

今回の候補者も多種多彩にわたっていた。高校・大学・社会人・国際大会の監督、プロ野球組織の運営に尽力された方、評論家や新聞記者。先達の業績と功績を競技成績のような定量データで示すことはできない。もちろんカテゴリー自体を比較することもできない。定性評価を軸に判断せざるを得ない。例年と同様に委員会の議論はおのずと熱がこもった。活発な議論の中で一つの意見が示された。「審判員は試合に欠かせない存在。しかし、試合という華やかな世界の中でスポットライトが当たりにくい。今年は光をあてたい」。投票では谷村氏が殿堂入りに必要な出席委員の75%以上の投票（11票）を獲得した。規程24条（2）の「審判員として、顕著な功績をあげた」業績が讃えられた。

谷村氏は、旧制同志社中学、同志社大学在籍中には選手として野球に打ち込まれた。1950年シーズンでは主将として旧関西六大学（現関西学生）秋季リーグで優勝、最高殊勲選手に選ばれた。卒業後は極東商事（現在の三菱商事）で勤務の傍ら、社会人野球の京都クラブでプレーを続け、都市対抗野球にも出場した。選手生活に区切りをつけた28歳から審判のキャリアが始まる。関西六大学リーグ戦はもとより、社会人野球、高校野球で審判としてグラウンドに立たれた。1955年からは春・夏の甲子園に8季連続で審判委員を務めた。

そして1959年に先輩からの誘いを受けて、セ・リーグ審判員に転じた。32歳の時だった。「審判員としての技術をさらに高めたい」。その強い思いから遅咲きのプロ入りを

果たしたという。「ゲームが終わって、帰路につくお客さんが『今日の審判は誰だった?』と思いつけない、そんな目立たないのがいい審判」「若い審判員に言い続けたことはただ一つ。無心で見たままを判定しなさい」。この姿勢を1986年まで28シーズン貫き通して3026試合に出場。オールスターゲームに6回、日本シリーズには11回出場された。



谷村 友一氏

現役引退翌年からは、セ・リーグ技術委員として後輩の指導に当たられた。セ・リーグ退職後の1997年からは全日本野球会議審判技術委員も務められた。アマの審判員と共に作成した『審判メカニクスハンドブック』を2002年に発刊し、プロアマ共通の審判員の指針を後進に示された。同書は現在も手引書として活用されている。

その後も春夏の甲子園大会には、スコアブックを手に全試合を観戦し、時に後輩の審判にアドバイスを与え続ける谷村氏の姿があった。審判員として高校野球から大学・社会人を経てプロ野球を経験された稀有な実績、そして後進育成の貢献。「目立たない人」の功績にスポットライトをあてさせて頂いた。

特別表彰委員会議長 井原 敦

写真提供：ベースボール・マガジン社

殿堂入りの人々を語る(75)

父の思い出

古関正裕 (2023年野球殿堂入り 古関裕而氏長男)



古関裕而氏

父は明治42年に福島県福島市で生まれました。生家は市内有数の老舗の呉服屋でした。父は子供の頃、よく福島駅近くの線路をまたぐ跨線橋に汽車を見に行っていたそうで、汽車など鉄道が大好きでした。

私が子供の頃の最初の思い出は3歳頃、父のお弟子さんがSLの模型を持ってきて父に見せていた時のことです。本物そっくりに煙?を出して走る鉄道模型で、父は欲しそうでしたが、多分母の反対で買わなかったのだと思います。戦後間も無い昭和24年ごろのことですから、きっとその模型は輸入品でとても高価な物であったのだと思います。

父は鉄道模型が大好きで銀座の天賞堂などで、世界的模型メーカー、ドイツのメルクリンの模型などをよく眺めていました。ものすごく欲しかったのだと思いますが、母はこのような趣味に理解がなかったので、無理に買わなかったのだと思います。私が小学生のころには、子供向けの32ミリゲージの汽車の模型を買ってきて、8畳間に8の字に線路をつなげて走らせて遊んだことを覚えています、そんな時も父の方が喜んで遊んでいました。

父は文房具なども大好きでしたが、特に楽譜を書く鉛筆にはこだわっていて、三菱鉛筆の黄色い消しゴム付きの鉛筆を愛用していました。消しゴム付きの鉛筆は、字を消すときに鉛筆と消しゴムを持ち替える必要がないので、とても便利だったのです。ところが昭和30年代の後半頃でしょうか、三菱鉛筆がそれまでの鉛筆をやめて、ユニという新しい紫色の鉛筆を製造・販売するようになりましたが、それには消しゴムがついていませんでした。困った父は三菱鉛筆に相談し、消しゴム付きのユニを特注で作ってもらえることになり、そのご縁で雑誌の三菱鉛筆の広告に登場したりしました。

呉服屋の倅のせいか父はとてもおしゃれでした。背広はいつも注文仕立てでしたが、それだけでなく、手入れも怠りませんでした。外出から帰ってくると、必ず洋服にブラシをかけ、靴もよく自分で磨いていました。何足もの靴を玄関先にずらりと並べて、せっせと磨いていた姿を思い出します。

カバンも好きで、オーケストラ用のスコアを入れるためのカバンを特注したり、海外に行くと必ず新しいカバンを持って帰ってきて、また買ったの?と聞くと嬉しそうに、良いカバンがあったのでね、と答えるのが常でした。

父の趣味はホームムービーの撮影で、戦前は9.5ミリ、戦後は8ミリフィルムで、私の運動会とか家族の記録を撮影していて、膨大な量のフィルムが残っていますが、幸いなことにそれらの映像の殆どが、NHKの協力でデジタル化されて、福島市にある父の記念館に収蔵されており、戦中の従軍慰問の映像など今となっては貴重な映像資料になっています。

また父は子供の頃から絵を描くのも好きでしたが、60歳ごろから、油絵を習い始めた母の影響で、水彩画を描くようになりました。旅行には必ずスケッチブックと、文房具好きの父らしく、英国のロウリーなどの携帯用の水彩のパレットを持参して、もっぱら風景画を描いていました。その描き溜めたスケッチは「風景の調べ」という画集にまとめて、記念館で展示・販売をしています。

幼い頃父は何代も続いた老舗の呉服屋の跡取り息子として、とても大事に育てられ、少しでも危ない遊びなどはさせてもらえなかったで、走ることも、投げることも全くだめでした。そんな運動音痴の父が昨年野球の殿堂入りという栄誉に浴したの、数々の野球応援歌やスポーツ大会のマーチなどを作曲したことによります。父は作曲家デビュー当初から早稲田大学の応援歌「紺碧の空」を作曲するなど、生涯にわたって若者たちを応援する歌を作り続けました。

いつまでもそれらの歌が歌い継がれることを願っております。

知ってほしいこんな資料(100)

野球塔銅板

「知ってほしいこんな資料」100回目は、2024年に開場100周年を迎える阪神甲子園球場にちなみ、当館所蔵の資料「野球塔銅板」(写真1)を取り上げようと思う。

そもそも「野球塔」(写真2)とは、全国中等学校優勝野球大会(夏の甲子園大会、現在の全国高等学校野球選手権大会)の第20回大会を記念して大会主催者の朝日新聞社によって建立された野外円形劇場である。ⁱ⁾

1934年7月3日午前10時20分より「建設地甲子園の正門東方の松林の中で行われた」ⁱⁱ⁾ 厳かな地鎮祭を経て工事は開始され、なんと約ひと月で完成。同年8月11日午後1時半より、参列者約300名の前で第19回大会までの優勝校選手18名の手によって除幕の綱が引かれ、塔すれすれの低空飛行で祝賀飛行が行われるなど、盛大な除幕式が行われた。ⁱⁱⁱ⁾

塔は高さ34m、塔中央部には2.4mの打者像(帝展審査員を務めた大國貞藏の作品)が堂々とバットを構えている。基部にはステージがあり、その上で選手たちが撮った記念写真は朝日新聞のアーカイブ等で見る事が出来る。古代ギリシャの円形劇場風の9段よりなる階段型観覧席は野球の9回にちなんでいた^{iv)}とのこと。2500人ほどの観覧者を収容可能で、観覧席下の平たくなっている広場のような部分では大会前日に茶話会が開かれた。夜間照明もあり、18個の電灯設備が備わっていた。^{v)} 周囲には20本の柱が、取り巻くような形で円形を作っており(円形柱列廊)、この柱に第1回からの優勝校名と選手名、審判員等を記録した銅板が取り付けられた。

「今後も優勝校不朽の名を刻み込むものである」^{vi)}と思われていたが、第二次世界大戦下に「塔が高すぎて鳴尾飛行場の飛行機の離着陸に危険だから」^{vii)}と壊された。戦中の様子は、川口永吉『甲子園とともに』中の写真から塔を取り囲む20本の柱があらこちらに向いて倒れ崩壊している様子が確認でき、無残な戦災の影響が伺える。戦後は残った瓦礫部分も「第二阪神国道建設のため取り払われた」^{viii)}のであった。

全国中等学校優勝野球大会は1941年第27回大会の地方大会途中で中断されたため、最大で26枚の銅板が作成された可能性があるが、現存している物は以下の4枚である。

- 第2回 慶応普通部(東京)
- 第18回 中京商(愛知)
- 第13回 高松商(香川)
- 第20回 呉港中(広島)

戦後にスクラップ(屑鉄)の中から見つけられた^{ix)}第20回呉港中(広島)のものは、甲子園歴史館にあり現在も常設で展示中である。第13回大会のものは香川県立高松商業高等学校に、第18回大会のものは中京大学附属中京高等学校のエントランスに展示されている。第2回大会の慶応普通部のものは、当館、高校野球のコーナーで展示しているためぜひ来館し、実物を見ていただきたいと思う。

その後、1958年に建立された選抜高校野球記念塔^{x)}を阪神甲子園球場リニューアル工事時に撤去、2010年に春・夏の高校野球の象徴として新たな「野球塔」が再建された。初代野球塔に倣い、列柱には、春・夏の大会の歴代優勝校名を刻んだ銘板を設置。永久に優勝校不朽の名を刻み続けるであろう。

学芸員 太田若菜



写真1



写真2

【注】i) 場所は甲子園球場の北東

ii) 『朝日新聞』1924年7月4日東京 朝刊

iii) 『朝日新聞』1934年8月12日東京 夕刊

iv) 堀内冷監修『目で見える西宮の100年』郷土出版社 2000年3月

v) 下村海南『本卦がへり』四条書房 1935年3月

vi) ii)と同様

vii) 川口永吉『甲子園とともに』1969年8月

viii) 『朝日新聞』1971年8月2日東京 夕刊

ix) vii)と同様

x) 『公益財団法人 日本高等学校野球連盟70年史』本編(2018年11月)によると、建立された場所は阪神甲子園球場西側の旧「待ち合わせ広場」の一角であり、「野球塔」(写真2)とは別の位置に作られた。(i参照)



こんにちは図書室です



関西のスポーツ誌「スポーツ日本」

今回は「スポーツ日本」をご紹介します。「スポーツ日本」は、昭和9（1934）年4月1日に大阪で創刊されました。創刊当時の大きさはタテ約38cm×ヨコ約26.5cmのタブロイド判でした。1週間に1回程度の頻度で発行されていたようで、関西の野球界を中心に、東京六大学野球や中等野球をはじめ、軟式野球、職業野球などを取り扱っています。当室では、創刊号～第150号までを原紙で所蔵しています。

創刊の経緯ですが、第4号〔昭和9年5月1日発行〕の編集後記に、簡単に記述されています。以下、一部引用します。

本社が創刊号を出して以来早いもので一ヶ月となりました、吾等同人一同は従来運動全般雑誌「スポーツマン」を発行して居た関係で「スポーツマン」の復活の意味に於いて球界各先輩のお勧めを受けて「スポーツ日本」の発刊を思ひ立つたのですが、…（以下略）

「スポーツ日本」は、後藤田理一氏と法政大学野球部出身の盛岡雅善氏を中心に、毎日新聞社の井口新次郎氏（1998年殿堂入り）の後押しもあり、総合スポーツ雑誌「スポーツマン」を引き継いで創刊されました。

主幹の後藤田理一（天庵住人）氏は、東京日日新聞社の運動課に勤務した後、「スポーツマン」を発行していた帝国運動社的主幹を経て、昭和9年3月にスポーツ日本社を立ち上げました。

創刊当時の発行部数は5,000部でしたが、昭和12（1937）年頃には12,000部に達します。第84号〔昭和10（1935）年12月25日発行〕には、「本紙一手販売取次店並市内外販売所」が掲載されており、大阪市内のみならず、名古屋、京都、奈良、神戸、福岡などまで販売地域が広がっていたことが確認できます。

『新修大阪市史 第7巻』（新修大阪市史編纂委員会編 平成6（1994）年3月31日発行）によると、昭和17（1942）年頃に、同じく関西のスポーツ誌として人気のあった「ベースボールニュース」を発行するベースボールニュース社との合併が持ち上がります。手を尽くし合併を回避しますが、創刊から10年目となる昭和18（1943）年半ばに休刊しました。

戦後の昭和21（1946）年1月に、「スポーツ日本」の編集をしていた北村正男（南想）氏によって雑誌「日本スポーツ」が創刊されました。この「日本スポーツ」は、“戦前のスポーツ日本の同志が再びスポーツの唯一の報道機関として読者諸兄の必携の新聞として本日ここに誕生”しますが、昭和26（1951）年頃には休刊に至っています。

当室では「スポーツマン」と「日本スポーツ」も一部所蔵しております。そしてこのたび、「スポーツ日本」と「日本スポーツ」をデジタル化することになりました。デジタル化に伴い、原資料がご利用いただけない期間がありますが、ご理解くださいますようお願い申し上げます。当室には「スポーツ日本」のような、当館でしか所蔵していない資料が数多く存在します。今後も、資料保存に積極的に取り組んでいきます。

司書 永沼里菜子

■図書室の開室時間

図書室は事前予約制です。2月29日（木）までは臨時休室となっております。詳しくは、<https://bml.opac.jp/opac/Top> でご確認ください。



「スポーツ日本」創刊号

野球殿堂博物館 トピックス

7月26日 バース氏来館、 殿堂入り記念展などをご見学



8月31日 ラミレス氏来館、 殿堂入り記念展などをご見学



9月8日 大島洋平選手来館、 2000安打達成バットなどをご寄贈



11月10日 ポニーリーグ展示更新、 広澤克実理事長来館



12月16日 野球の学校2023

公式記録員が教える
「NPB式スコアの付け方」教室 中級編
講師:NPB記録データ管理部 山川誠二氏



企画展「野球報道写真展2023」

会期 2023年12月9日(土)～2024年2月12日(月・休)

12月9日
オープニング見学会
栗山英樹氏来館



12月20日
牧秀悟選手来館
(横浜DeNA)



12月22日
谷保恵美氏来館
(元千葉ロッテ球団職員)



展示のお知らせ

「プロ野球90年記念展 チームと選手が紡いだ90年」

会期：第1期 2月27日(火)～5月6日(月・休)
第2期 5月8日(水)～7月2日(火) ※5月7日(火)は展示替えのため閉室いたします。

2024年、プロ野球は創立90年の節目を迎えました。

本展は2期構成で、第1期はチームと監督や関係者に関わる資料を、第2期はスター選手と大記録に関わる資料を中心に展示し、昭和・平成・令和と歩みを続けるプロ野球90年の歴史を振り返ります。



「第8回 野球で自由研究!コンテスト」作品展

会期：2024年3月17日(日)～4月7日(日)

会場：殿堂ホール

2023年に小学生を対象とした「第8回 野球で自由研究!コンテスト」(主催:公益財団法人野球殿堂博物館、協力:一般社団法人日本野球機構、株式会社NPBエンタープライズ)を開催しました。2023年8月1日(火)～11月30日(木)の期間、野球をテーマとした自由研究の作品を募集したところ、過去2番目となる239作品の応募がありました。

山中正竹氏(2016年殿堂入り、一般財団法人全日本野球協会会長)、田原淳子氏(国士舘大学教授)、平田稔氏(日本野球機構野球振興室長)、庄司正信館長の4名による審査の結果、受賞作品が決定しました。受賞作品の発表と受賞者への表彰式を3月16日(土)に行い、翌17日より、受賞作品を中心に子どもたちの力作・大作を展示する「第8回 野球で自由研究!コンテスト」作品展を殿堂ホールにて開催する予定です。



野球殿堂博物館 維持会員 (2024年2月9日現在・順不同・敬称略)

2023年8月16日以降、維持会員にご入会、または維持会費をご入金いただいた皆様です。有難うございました。今後ともよろしくお願い致します。

《法人・プラチナ会員 -10年以上継続-》公益財団法人日本学生野球協会、公益財団法人全日本大学野球連盟、公益財団法人日本高等学校野球連盟

《法人・一般会員 -5年未満-》一般社団法人日本ポニーベースボール協会

《個人・一般会員 -5年未満-》栗山智砂子、黒川隆、広澤克実、那須勇元、山脇剛大、小林薫、相澤孝行、櫻井宣久

《ジュニア会員》久保愛莉、五月女拓史

博物館からのお知らせ

▶博物館公式グッズ/新商品のご案内

●シャープペンシル(水色、紺色)

販売価格：800円(税込)



芯が折れにくいゼブラ・デルガードシステムのシャープペンシル(0.5mm)です。以前販売していた水色に加え、新たに紺色が登場しました。館名(英語)、ヘルメット、バット、ボールがデザインされた当館オリジナル商品です。子供から大人まで使用できるシンプルなデザインになっています。

●キーホルダー 丸(写真左)

販売価格：750円(税込)

●キーホルダー 四角(写真右)

販売価格：800円(税込)

11月から販売の新商品です。それぞれ館名(英語)と、丸にはボール、四角にはバットのデザインを焼印した当館オリジナルのキーホルダーです。

四角のキーホルダーは金具を外してバッグやベルトなどに着けることができます。来館記念のお土産にいかがでしょうか。



▶第4回理事会(2023年10月25日開催)

議題 1. 退職給付引当資産の積立について

2. 評議員候補者の承認について

3. 会議日程等の承認について

報告 1. 理事長及び業務執行理事の職務の執行状況について

2. 公益法人としての要件である収支相償への対応のための施策について

3. 特別表彰委員交代及び2024年野球殿堂入りスケジュールについて

4. 職員採用について

5. 冬季臨時休館について

場 所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 10:00～17:00(最終入館16:30)

※東京ドームでプロ野球が開催される日は、18:00閉館(最終入館17:30)

入 館 料 大 人 600円 小・中学生 200円
高・大学生 400円 65歳以上 400円

休 館 日 月曜日(祝日、東京ドームでのプロ野球開催日、春・夏休み中は開館)、年末年始(12月29日～1月1日)

※休館日及び開館時間は変更する場合がございますので、事前に当博物館ホームページにてご確認ください。

●編集後記

今年の殿堂入りの方々が決まりました。3氏の表彰式をお楽しみに。

野球殿堂博物館 Newsletter 第34巻 第1号

2024年2月22日発行

編集・発行 公益財団法人 野球殿堂博物館

〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61

Tel 03(3811)3600 Fax 03(3811)5369

<https://baseball-museum.or.jp/>

